

響き合うテキスト(三) 異国の師の面影

——豊子愷の「林先生」と漱石の「クレイグ先生」、魯迅の「藤野先生」

西 楨 偉

はじめに

近代中国の文筆家、画家豊子愷(二八九八—一九七五)は、一九二一年春から一年未満の日本留学を体験した。彼は生涯の師李叔同(二八八〇—一九四二)の影響を受け、日本で西洋美術と音楽を習おうとした。李叔同は明治末の日本留学生で、西洋美術と音楽を中国に紹介し、根付かせようとした草分けとして、また晩年は仏教指導者として知られる。彼は一九〇五年秋に東京に留学し、一九一一年春に帰国したので、その滞在は足掛け五年あまりになる。それに比べて、豊子愷の留学期間はかなり短いものだった。とはいえ、後年彼が活躍するための素地が作られ、その文学、美術、音楽にわたる多彩な業績は日本と深い関わりをもつに至るのである。

豊子愷は随筆家として多くのエッセーを発表し、その中には留学

中の思い出を綴ったものもある。一九三六年一月から二月にかけて創作された「記東京某音楽研究会中所見(東京の某音楽研究会での見聞)」、「林先生」は、いずれも雑誌『宇宙風』に掲載された。留学から十五年の歳月が経ち、彼は文壇においても、画壇においても相応な地位を築きあげていた。教職など一切の職務を辞し、故郷に縁堂という書斎兼住居を建て、著作と絵画創作に専念していた彼は仕事充実し、生活にも余裕が感じられた時期である。留学当時の体験が文学として結晶するのに十分な時間が経過し、また彼はそれを語りたくなる心境であつたろう。

ところが、漫画創作と同様、豊子愷のエッセーも実はモチーフやテクニクを先行作品に負うところが大きいと考えられる。筆者は豊子愷の小品文と夏目漱石などの関連を探ろうとして、すでにいくつかの論考を試みた¹⁾。日本留学を回想したこの二篇のうちの「林

先生」も、留学当時の思い出に基づきながらも、彼の読書体験に刺激されて生まれたのではないか、というのが本論の主張である。

「林先生」はヴァイオリンの個人教授を受けた林先生との交流を通し、林先生の人間像をスケッチしたものである。十年一日の如く、音楽の個人教授を生業とし、独身で人付き合いも少なく、あまり外出もしない林先生の人間像は、みずからの天職に生涯を捧げる奇人というキャラクターにおいても、またその筆致——表現技巧においても、漱石の筆に描かれたクレイグ先生に一脈通じるところがある。というのも、一九三〇年代半ば、豊子愷は漱石の小品文を愛読していた節があり、彼は「クレイグ先生」(一九〇九)をもとに「林先生」を構成し、書いたのではないかと思われるのだ。

したがって、本論では「林先生」と「クレイグ先生」を比較対照し、その異同を考えていきたいのだが、魯迅(二八八—一九三六)の「藤野先生」(一九二六)をも視野に収めたのは、次のような理由による。一つに、両者は同一系譜上の文学作品であり、豊子愷がそれを意識した可能性があり、また仮にそうでなくても両者の比較は、豊子愷の特色を浮かび上がらせるには有益であろう。次に、「藤野先生」は「クレイグ先生」の影響を受けたとされ、それゆえ三者の比較によって、新たな視点が得られるのではないかと期待されるのである。

一 髪のもがもじゃもじゃの林先生

「林先生」は一九三六年三月一日発行の雑誌『宇宙風』に掲載された、上下二段組みで三ページの小品散文である。後、『縁縁堂再筆』(一九三七年一月)に収録の際、「記音楽研究会中所見之二(音楽研究会での見聞(二))」と改題された。同じく留学体験を記した「記東京音楽研究会中所見(東京の某音楽研究会での見聞)」も改題され、「記音楽研究会中所見之一(音楽研究会での見聞(一))」とされた。相前後して書かれ、発表された二篇の関連性から「一」と「二」に改められたと思われるが、タイトルから日本を連想する固有名詞が削除されたことは見逃すことはできないだろう。「林先生」の「林」は中国人にも見られる人名で、必ずしも日本人を指し示すわけではないが、二篇とも東京での体験を述べており、残してもよい「東京」という地名も削られたのである。

これは当時の時代背景を反映している可能性がある。『縁縁堂再筆』の刊行は日中戦争の直前であり、それまで両国関係は悪化の一途をたどっていた。豊子愷は中国の対日感情を考慮し、改題を行なったのかもしれない。ついでに言えば、この二篇が一九三六年初頭に書かれたのはまだ幸いであった。翌年に日中戦争が勃発し、親日と見られる言論の発表は困難となるからである。

しかし、この改題により、作品の印象はずいぶん変わったのでは

なからうか。日本留学体験記という意味合いがタイトルから除かれ、特に二篇目は林先生を描いたポートレート文学という性格も見えにくくなった。そして、作者が意識したかどうかにかかわらず、この改題は、「藤野先生」や「クレイグ先生」との関連を隠蔽するという役割を果たしたのではないとも思われる。

さて、留学中に豊子愷が出会った林先生はどんな人物であろうか。ここで彼のエッセーに沿って、見ておくことにしよう。冒頭の一節はこうである。

蔵書の整理をしていると、たまたま手で写した楽譜が一冊出てきた。暗黄色の表紙は既に古び、ブルーのインクも深い黒に変色している。自分はこの冊子とかなりなじみが深かったと見える。ページを開くと、すべてヴァイオリンのピアノ伴奏譜である。曲の題目はわたしの筆跡に違いない。しかし、いつ、何のために、どこでこの楽譜を書き写したのだろうか。なかなか思い出せなかった。最後のページまで繰っていくと、裏表紙の裏に三行のローマ字が斜めに書かれており、それもわたしの筆跡であった。そこには、

What is in your heart let no one know;
When your friend becomes your foe,
Then will the world your secret know.

とある。読んでみると、慣れた調子で、意味も素直に飲み込める。かつては熟読し、しかも心惹かれた一節と見受けられる。冊子を手に、しばらく思い返してみると、行間より髪の毛がもじゃもじゃした林先生の顔が浮かび上がり、それから次々とわたしの脳裏に思い出がよみがえったのである。⁽³⁾

蔵書の間に紛れていた一冊のノートが思い出の扉を開けてくれた。この描写は詩的で、と同時に映像的である。語り手の目がカメラの役割を果たし、古びたノートの黄色い表紙、そして変色したインクの色を映し、裏表紙の内側にある三行の英詩をゆっくり映しては、その詩行に林先生のポートレート写真を重ねて浮かび上がらせていく。このノートはどうやら作者と林先生を結び付けるもののようにだが、この段階では詳しい説明はなく、後半から最後にかけてようやく正体が明かされる。三行の英詩についても、そこから林先生の印象が現れたとすれば、林先生の性格を表わすものと思われるが、ここではまだ確かなことはわからない。

引き続き、林先生の紹介は次のようになされる。

林先生は、十六七年前わたしが東京に留学した折に教わった音楽の先生である。名はすでに忘れてしまったが、ハヤシ先生と呼びたことはよく覚えている。東京で一番にぎやかな電

車停留場の一つ、春日町付近のとある路地の中にお住まいがあった。彼の音楽個人教授の広告看板に案内図が付されており、停留場から見えるとところに掛けられていた。⁽⁴⁾

豊子愷の留学は一九二一年、本文の執筆は一九三六年なので、五年ほど時が過ぎたことになる。そのせいか、彼は林先生の名をすでに忘れていた。林先生の教室に入る前に、彼は別の研究会でヴァイオリンを数ヶ月習っていた。そのテキストがやや無味乾燥に思われたため、彼は新たに個人教授を探していた。その矢先に、彼は林先生の広告看板を目にしたわけだ。

初めて林先生の家を訪ねたときの事を、豊子愷は次のように回想する。

ある日、わたしは春日町でその看板を見て、道順を示す矢印に従って、大きさが不揃いの石を敷きつめた路地に入り、彼の家へ入学案内をもらいに行った。彼の玄関の扉は開いたままで、中に入ると階段があった。二階から断続的に音楽が聞こえてくるが、人は見当たらなかった。玄関をまたいで、「ごめんください」と言って、わたしは階段を上った。二階に上って、わたしは思わずはっとした。階段を上りきると長方形の部屋があり、中に長方形の低いテーブルを囲み、大勢の人が壁に沿って床の

上に威儀を正して座っているではないか。低いテーブルの上にあるのは香炉の形をした灰皿のみである。その情景は、今思い出してもなお不思議で、まるでお寺から羅漢をたくさん運んできて、香炉を立てて家で供養しているかのようだった。わたしは「入学案内を二部欲しいのですが」と言ったが、すぐに返事は返ってこなかった。しばらくして、入り口近くに座っている人がテーブルの下から紙を一枚取り、無言で手渡してくれた。それを手に、わたしが階段を降りようとすると、奥の部屋から演奏が始まり、ゆったりした美しいメロディーが、玄関外の不揃いの石を敷きつめた路地まで送ってくれたのである。⁽⁵⁾

当時二十三歳の豊子愷青年は、人の紹介や案内もなく、一人で訪ねて行った時の緊張感が伝わる一節である。大きさが不揃いの石を敷きつめた路地、そして林先生の二階で見たやや奇妙な光景が印象深かったようだ。

翌日、彼は入学の申し込みをしに訪れ、そこで初めて林先生その人に会うことになる。林先生は、「和服を着た、髪の毛がもじゃもじゃの男性」であった。初心者ではない豊子愷は、林先生から入学を許可され、週三回レッスンを受け、月謝は六円である。それは安くはなかったが、豊子愷はヴァイオリンのソナタを習いたいとの希望を述べ、その日からテキストを入手し、教室に通い始めた。その

日の午後レッスンを受けに来た彼は、またも前日に見た不思議な光景を目の当たりにするが、そこで彼はなぜ皆が静かに座っているのかを理解した。彼らは待合室でレッスンの順番を待ち、またはレッスン後に聴くためにわざわざ居残り、そこに端座しているのだ。レッスンとはいえ、学生はたいがい相当高いレベルに達しており、演奏する曲も聴き応えのある名曲ばかりなので、皆が羅漢のようにじっと座って耳を傾けているのである。

また、豊子愷によれば、林先生の教え方は厳格でありながら、面白いという。それまでのレッスンをマスターしていなければ、決して先へは進まず、ただ生徒に助言と励ましを与えるのみである。それから弾きなれた曲を弾いてもらい、先生の伴奏で円満に弾き終えたら、それでよしとする。激励を受けた生徒は、おのずから努力し、曲を弾きこなしてから授業に臨む。そうした林先生の教授法を紹介しながら、豊子愷は行間に先生の姿を織り交ぜ活写するのである。原文を少し引用する。

すると林先生はすっかり興に乗り、伴奏するときには手は舞い足は踏むというあんばいになる。と同時に、あの髪の毛がもじやもじやとした顔も曲のニュアンスに従って、さまざまな表情を表わし、音楽の気分を助ける。だから授業というものの、演奏される音楽はみなよく練れており、コンサートで聴くもの

のような気がした。生徒たちがみな待合室に居残り、傍聴したがったのも無理はない。先生の技術は非常に高いレベルに達しておられ、一方で難しい伴奏をしながら、一方で周到に生徒さんに気配りし、時々口や目の色、あるいは態度で合図を示して、難関の到来や直すべき点、そしてさまざまな注意を予め知らせるのである。よって、生徒は完全にレッスンをマスターしていなくても、林先生の助けを借りれば、おのずと船を下流へ押し出す如く、うまく演奏できるようになる。もしすでに完全にマスターしていれば、先生の伴奏に合わせて弾くと濃厚な興味が湧いてくる。わたしはいまだ覚えているが、当時東京住まいの最大の楽しみは、曲を充分稽古しておいて林先生に伴奏していただくことであつた。⁽⁶⁾

表情豊かに、体全体を使って音楽を教える林先生の姿が実に生き生きと捉えられている。豊子愷は中国では李叔同に音楽の手ほどきを受け、来日後別の音楽教室で、ある女性教師にヴァイオリンを習ったことがあつた。つまり、彼は複数の音楽教師に接していたが、林先生の教え方はことのほか特徴があつたということであろう。彼は生涯にわたり、李叔同を師として仰ぎ、その感化を強く受けたが、音楽教師としての李叔同は、どのような教え方をしていたのだろうか。豊子愷のエッセー「為青年説弘一法師（青年のために弘一法師

を語る」(一九四三)には次のくだりがある。

彼(李叔同をさす、引用者注記)の授業を受けるとき、特別な感じがしたものである。それは「厳粛」そのものであった。

(中略)自分の席に座り、恐る恐る前方を見ると、さっぱりした黒の上着を身に着けられた長身瘦軀の李先生はすでに講義機の前に座っておられる。その広々とした額、ほっそりとした眦、端整な鼻は威厳のある表情をたたえていた。平らで広やかな唇の両端にはしばしば笑窪が見られ、穏やかな情愛を表わしていた。この表情は「温おんにして厲れい」という言葉がぴったりである。^(一)

浙江第一師範学校(杭州)で、豐子愷は李叔同から音楽を教わった。上に引いたのは、李の逝去(一九四二)を悼み、豐子愷が綴ったエッセーの一節である。一九一四年、李叔同が日本から帰国して三年後、豐子愷は彼に音楽を習った。それは西洋音楽の教育がようやく始められた時期で、音楽の授業はさほど重視されていなかっただけに、豐子愷が「厳粛」な態度に打たれたのであった。それから、彼は李叔同の人格とともに西洋美術や音楽に惹かれ、他の科目よりも真剣に取り組んだという。豐子愷がここで描いたのは、「厳粛」であり、温厚な中にきびしいところがある音楽教師像である。孔子の容姿を形容し、論語に見える「温にして厲」ということばが用い

られたことからわかるように、それは伝統的な教師像とかけ離れたものではなかった。また、来日後に教わった女性教師も懇切丁寧に指導してくれたが、林先生の方がよほど自由奔放で個性的に見えたであろう。林音楽教室に通うことが東京住まいの最大の楽しみとなったのは、林先生の教え方とその魅力的な人柄にもよるが、やがて居残り傍聴者となった豐子愷と林先生の間に交流が生まれるようになったということにもよる。

ある日、最後に帰ろうとした豐子愷に、教室から出てきた林先生は声をかけた。二人は雑談を始め、話題はプライベートにも及び、豐子愷は林先生の人となりについて理解を深めていった。そこで、彼はそのポートレートを次のように描いていくのである。

わたしも彼の身の上についていろいろ尋ねた。彼は非常に乗り気になって答えてくれた。そこで、彼は寂しい独身者で、日本の音楽学校を出てから、ドイツに留学したことがあることをわたしは知った。帰国後すぐ東京のこの小さな路地で個人教授の教室を開いて、もう十年になる。毎日午前九時から午後五時まで音楽を教え、または伴奏をしている。そのような生活は変化に乏しく楽ではない。「わたしは音楽を生活とする者です」と彼は言った。そう言いながら両手を伸ばして、わたしに見せた。指先の皮膚が恐ろしいほど厚くなっており、十枚の螺鈿を

くつつけたかのようだ。わたしは他の生徒から、こんなことも聞いた。この先生の生活は非常に偏屈で、音楽のほかにこれといって趣味もないらしい。普段は家に閉じこもり、訪ねてくる友人もない。朝になれば仕事を始め、日が沈めば休むといった風で、音楽を教えて糊口するほか、世に求めることもなく、世間も彼に求めない。わたしは彼の指先にくつつけられた十枚ほどの螺鈿から彼の細長い手、そしてその筋肉質の腕、それから長年ヴァイオリンを支え持つために左が高く右が低くなった肩、さらにその辺幅を飾らない衣服、髪の毛がもじゃもじゃとした顔に至るまで眺めて、授業中に聴くあの美しい音楽が、この体が演奏したものだとわたしにはほとんど信じられなかった。わたしはこんな想像もした。彼の身体は精巧に作られた音楽を奏でる機械のようで、ずっと働き続けたので見かけは古く汚いが、中のバネ、歯車、ボルトなどの部品は何一つ欠けているものではなく、みな丈夫で故障もない。それは、世にあるいかなる本物の機械も敵わないのである。人間が音楽という芸術を作り出したのは、元来心靈を陶冶し、趣味を増やし、生活に潤いを与えるためである。しかし、この方は逆に世間のあらゆる名誉や享樂を捨て去り、生涯をこの芸術に捧げようとしておられる。年がら年中、朝から晩まで、この細い路地の二階建てに閉じこもり、この芸術のために辛苦をなめ、他人の生活に幸せ

をもたらしている。もし、特殊な精神生活に支えられていなければ、とても続けていられるものではない。するとわたしは、髪の毛がもじゃもじゃとしたの方がますます尊敬に値し、この螺鈿をくつつけた手がますますいとおしく感じられた。彼の年恰好は、もう五十を越したように見受けられる。この生活が今後、長くても二十年ぐらいで終わってしまうだろう。と思うと、わたしはそつと自分の腕に手をやり、惜しいかなこの類まれな精神、この素晴らしい技術が、いつかは衰え朽ちてゆく身体に根を下ろしている以上、この世から消えていく運命にある。そこで、「先生が編集された伴奏譜は、出版されたことがありますか」と、わたしは質問をした。彼は、「出版などするつもりはありません。でも、君が好きなら、持っていて写してもいいよ」と答えてくれた。その晩、帰るときわたしは早速数曲お借りし、持ち帰り、黄色いハードカバーの楽譜ノートに書き写した⁽⁸⁾。

引用が長くなつたが、豊子愷が情熱のこもった筆致で林先生の間像を描きあげている一節であり、その文章技法がうかがえるところでもある。ここの描写にはいかなる特色があるのだろうか。まず、冒頭の一段にも見られたことだが、作者は対象を画家のように写生をしておいては、みずからの心理描写を織り交ぜていくという手法

をとっている。つまり、非常に厚い皮膚に覆われた林先生の指先を一瞬クローズアップしてから、彼は同窓の口を借り、林先生のやや孤独で単調な日常生活を紹介する。そしてまた指先に視線をやり、指から順に手、腕、肩、服装、頭部へとスケッチを進める。画家の目が生かされているといえよう。そうして言葉による肖像を描いてから、彼はまたも林先生の内面に思いを馳せる。確固とした精神で心に秘めているからこそ、日々の労苦にも耐えられるのだと考えると、彼は林先生に敬意を抱くようになる。そこでもう一度、林先生の髪の毛がもじやもじやとした頭と螺鈿をくつつけたような指に触れてから、林先生の精神が永遠であれとの願いから、彼は質問をし、楽譜を借りては写したのである。

こうして、豊子愷は林先生と親しくなり、その後彼はしばしば居残り、仕事が終わった林先生と雑談する機会を得た。そのうち、林先生は彼をみずからの居室に案内し、そこで豊子愷は、林先生のイメージを喚起した三行の英詩に出会うのである。三部屋しかない林先生の家は、二階の待合室と、その奥の教室、そしてさらに奥の寝室からなる。林先生の居室はすなわち奥の寝室であり、それを豊子愷はこう描いている。

中には音楽書を詰めた本棚がいくつか、小さなテーブルが一つ、座布団がいくつかあるほか、壁飾りが二つかかっていた。

壁に長い額はベートーヴェンの肖像で、横に長い方は毛筆で書かれた三行の英詩であった。それは前に掲げた三句で、筆のタッチは篆書だが、文字はアルファベットである。詩の文句はどこか不思議な感じで、当時まだ若かったわたしの心をとらえた。わたしはすぐに暗記し、下宿に帰ってそれを楽譜ノートの裏表紙の裏側に書きとめた。この三行の詩が林先生の生活によく合っていると思う。それから、レッスンを受けに行くたび、林先生に会うたび、この冊子を手取るたび、はなはだしくは春日町を通るたび、わたしはいつもこの詩句を思い浮かべるのだった。林先生に別れを告げ、東京を離れるまで、この詩がずっとわたしの胸に響いていた。⁽⁹⁾

ここでやっと、冒頭に引かれた三行の英詩と林先生の関わりが明らかになった。胸のうちを誰にも語るなかれ、相手が友人だとしても、裏切られた暁には、あなたの秘密はすべて知られてしまうのだから。そんな詩句はなぜ林先生のモットーとなり、また豊子愷がそれに惹かれたのだろうか。林先生の詳細がわからない現段階で、この問いの前半を考える手がかりは残念ながら見当たらないが、後半については次のような理由が挙げられるのではないだろうか。林先生のイメージを豊子愷は理想化して描いていると思われ、彼は林先生を世間と隔絶した、孤高の芸術家として見ていたと思われる。世

俗にこびへつらうことなく、楽譜を出版しようもしないことから名利を求めようもしないその恬淡寡欲な精神もうかがえ、豊子愷は林先生に東洋的隠者に近いような、精神性の高い芸術家を見出し、いたにちがいない。三行の英詩は、まさに孤高であろうとする意志の表明として、豊子愷が理解したのではないだろうか。彼はそうした芸術家を愛好し、彼自身もその系譜を引く一人であった。⁽¹⁰⁾

このように冒頭に呼応した形で、林先生のポートレートは仕上げられ、昔語りはここで終わり、小品は次の一段で結ばれた。

帰国後、わたしは音楽の技術修練から遠ざかり、十六七年もこの楽譜の冊子を古本箱の底にしまったままにしていた。詩の印象も林先生の思い出も、十六七年という歳月の中で、だんだんと薄らいでいき、ほとんど跡形もなくなるところだったが、古本の整理がきっかけとなり、昔の事をもう一度振り返ることとなった。それはあたかも色あせた写真を描線でもう一度繕うようなもので、写真本来の写真味はなくなったかもしれない。⁽¹¹⁾しかし、なんとなく画意と詩趣が得られたように思う。

一冊のノートを再び手にとることで呼び醒まされた思い出は、つかの間の夢のように語られた末、作者は我に返った。音楽の演奏をしなくなり、当時とはすっかり異なる道を歩むことになった自分を

再確認し、彼は時の流れに感慨を抱いたようである。そして、最後の一文は実に見事なのだが、一枚の色あせた写真という表現は、冒頭部で詩句の間に浮かび上がった林先生の顔に呼応する。「画意」と「詩趣」はまさに本文の特色そのものである。つまり、作者は意図的に林先生のポートレートを絵画的な手法で、詩情豊かに描きあげようとしたと考えられる。

二 「林先生」と「クレイグ先生」

「クレイグ先生」は漱石がロンドンに留学した折の個人教師クレイグ氏 (Craig, William James 一八四三—一九〇六) を偲ぶエッセーであり、ポートレート文学である。上、中、下の三章からなり、一九九四年版の全集では十ページほどの長さである。それを「林先生」と突き合わせて読むとさまざまな類似点が見出され、それらは題材の共通性から生じる偶然の一致とも予測されるが、果たしてそうであろうか。「クレイグ先生」の展開に沿って、見ていくことにしよう。

「クレイグ先生は燕の様に四階の上に巣をくつてゐる。舗石の端に立つて見上げたつて、窓さへ見えない」という冒頭の一文は、詩的である。こつこつと研究に打ち込むクレイグ氏の様子が追い追いかれるため、「燕」という比喩はなかなか相応しい。

この詩情溢れる冒頭に呼応するのは、(下)の次のくだりである。

客間を鍵の手に曲ると六畳程な小さな書齋がある。先生が高く巢をくつてゐるのは、実を云ふと、此の四階の角で、其の角の又角に先生に取つては大切な宝物がある。――長さ一尺五寸幅一尺程な青表紙の手帳を約十冊ばかり併べて、先生はまがな隙がな、紙片に書いた文句を此の青表紙の中へ書き込んで、吝坊が穴の開いた銭を蓄る様に、ぼつり／＼と殖やして行くのを一生の楽しみにして居る。此の青表紙が沙翁字典の原稿であると云ふ事は、こゝへ来出して暫く立つとすぐに知つた。⁽¹²⁾

「燕」という語は繰り返されないが、「巢をくつてゐる」という表現により、冒頭に対応している。ここで、「燕」はシェークスピア語彙字典の編著にいそむクレイグ氏の喩えとして明らかにされた。紙片は燕が銜える泥や枝のアナロジーと見ることもでき、「まがな隙がな」「ぼつり／＼」といった疊語の使用も効果的である。手法は多少異なるが、「林先生」も導入部分と末尾に詩情を漂わせた構成である。

次に、漱石はクレイグ先生の門前を描写するのに対し、豊子愷も林先生の家に至る路地とその玄関に注目する。また、彼らが先生の家に上がって、ともに滑稽な情景に出くわすのである。「林先生」では、部屋の中に羅漢像をお寺から運んできて、香炉を立てて供養

でもしているかのような様子だったが、漱石は女中のしぐさに可笑し味を感じたようだ。

開けて呉れるものは、何時でも女である。近眼の所為か眼鏡を掛けて、絶えず驚いてゐる。年は五十位だから、随分久しい間世の中を見て暮した筈だが、矢つ張りまだ驚いてゐる。戸を敲くのが気の毒な位大きな眼をして入らつしやいと云ふ。⁽¹³⁾

女中ジェーンはクレイグ氏の身の回りの世話をし、小品では脇役として、何度か登場する。書物を探して、それが見当たらなければクレイグ氏は大声で彼女を呼び、彼女が来ては即座に見つけ出すのである。そうしたやり取りにおどけたところがあり、滑稽な感じがする。「随分久しい間世の中を見て暮した筈だが、矢つ張りまだ驚いてゐる。戸を敲くのが気の毒な位大きな眼をして」などの表現は、ユーモアを出そうとした誇張であらう。したがって、ユーモアの効果を狙った豊子愷の手法は漱石のそれに通じるものといえる。

漱石は玄関先から描き始め、取次ぎの女中との対面をしてから、クレイグ氏に会うところを描写するが、それは漱石が通った折の日常を叙述したもので、必ずしも彼らの初対面の様子ではない。会えば握手の挨拶を交わす場面も描かれ、「握り返した事がない」クレイグ氏の「消極的」な手は漱石には印象的だった。漱石は手のほか、

クレイグ氏の顔、髻、肩にも注目する。それは身体の中で人物の風貌をよく表わすところにちがいない。たとえば、漱石はクレイグ氏をこう描く。

其の顔が又決して尋常ぢやない。西洋人だから鼻は高いけれども、段があつて、肉が厚過ぎる。其処は自分に善く似てゐるのだが、こんな鼻は一見した所がすつきりした好い感じは起らないものである。其の代り其処いら中むしやくしやしてゐて、何となく野趣がある。髻杯はまことに御氣の毒な位黒白乱生してゐた。いつかペーカーストリートで先生に出合つた時には、鞭を忘れた御者かと思つた⁽¹⁴⁾（傍線は引用者による）。

先生の得意なのは詩であつた。詩を読むときには顔から肩の辺が陽炎の様に振動する。――嘘ぢやない。全く振動した。⁽¹⁵⁾

漱石の描写を内容と形式から見てゆきたい。クレイグ氏の鼻の形から、顔はどちらかといえば好感を持たれない部類のようだ。髻も整えないためか、「黒白乱生」している。野趣があり、飾り気のない風貌である。詩を読むときは肩を震わせるのは、詩に感動し共鳴するからにちがいない。クレイグ氏は詩に対して深い造詣があり、愛情を持った人である。

林先生の顔や表情を写し取った豊子愷の文章を思い起こせば、クレイグ氏のそれに通じるところがあるのではないだろうか。林先生の鼻や髻についての細部描写こそないものの、「毛髪蓬松の顔面（髪の毛がもじやもじやとした顔）」という表現は繰り返され、彼も髪の毛や髻を「乱生」させているのだらう。また、演奏中、手足、口、目の色を用いて、豊かな身体表現を伴うのは、クレイグ氏も同様なのである。彼は肩を震わせるばかりではなく、その手や指も実にさまざまな表情を見せる。両者はともに奇人、野人の趣きがあるといえよう。

次に文章作法の特徴を見ると、クレイグ氏の顔を描いた一段は「其の顔が又決して尋常ぢやない」という主観的な一文に始まり、次には「西洋人だから鼻は高いけれども、段があつて、肉が厚過ぎる」と、写真につとめようとした表現が置かれ、続いてまた主観的な表現に切り替わる。その次の「髻杯はまことに御氣の毒な位黒白乱生してゐた」はやや主観が混じるが、写実的な傾向が強いとみなせば、この段落はほとんど主観的感想と客観的写実の反復によって構成されているといえる。この表現技巧も、先に見たように、豊子愷が「林先生」で駆使していたものである。

クレイグ氏との握手を書いたところで、漱石は初対面の折に、彼と授業料について話し合ったことを思い起こし、また支払いをよく催促されたことも記した。このあたりに関し、平川祐弘氏が評する

ように、儒教文化圏の習慣にはない金銭感覚に漱石が違和感を覚えたのだらう。⁽¹⁶⁾ 一方の豊子愷は、林先生の月謝は六円で、高かったと述べたにとどまる。

それから、漱石はアイルランド人であるクレイグ氏の言葉に詠りがあることに触れてから、先に引用したが、その風貌をスケッチし、その教え方に話題を移していく。(中)は、両者の詩についての談義に終始し、(下)はクレイグ氏の過去と現在の研究を起伏のある語り方で紹介してから、氏との別れと氏の死亡記事に接した事を記したところで、小品が締めくくられた。

以上のストーリー展開に対して、(中)に対応する内容は「林先生」には見当たらない。豊子愷は林先生と音楽談義を交わしたであろうが、あまり詳しい記述はなく、むしろ英詩が引かれたことで林先生の文学趣味を感じさせるばかりか、作品全体に詩趣を添え、(中)の内容に相当するともいえる。それに、漱石との談話などにより、クレイグ氏は文学そのものに生涯を捧げているという感があるが、林先生もみずから「わたしは音楽を生活とする者です」と告白するように、文芸に生きる彼らの姿勢はそれほど異なるものではない。

クレイグ氏はライフワークとして、シェークスピアの語彙字典を編纂し、その膨大な仕事に漱石は興味を覚え、さまざまな質問をしたが、それが氏の死によって未完に終わったことに漱石は遺憾の意

を表わした。それまでに、氏との間の師弟の愛といった感情をあまり筆端に載せなかった漱石が、小品末尾になって、次のように書いた。

自分は其の後暫くして先生の所へ行かなくなつた。行かなくなる少し前に、先生は日本の大学に西洋人の教授は要らんかね僕も若いと行くがなと云つて、何となく無情を感じた様な顔をしてゐられた。先生の顔にセンチメントの出たのは此の時丈けである。自分はまだ若いぢやありませんかといつて慰めたら、いや／＼何時どんな事があるかも知れない。もう五十六だからと云つて、妙に沈んで仕舞つた。

日本へ帰つて二年程したら、新着の文芸雑誌にクレイグ氏が死んだと云ふ記事が出た。沙翁の専門学者であると云ふことが、二三行書き加へてあつた丈である。自分は其の時雑誌を下へ置いて、あの字引はつひに完成されずに、反故になつて仕舞つたのかと考へた。⁽¹⁷⁾

消極的な握手といい、相手の理解をあまりわきまえない教え方といい、書生として住み込む漱石の希望がかなえられなかったなど、これまでクレイグ氏は愛情のある人物として描かれていなかった。しかし、別れに際して、漱石が日本に戻ればもう会えないだろうと

考えてか、クレイグ氏は日本に行つて働いてもよいとまで言うのであった。惜別の情が顔に表れたクレイグ氏に、漱石は慰めの言葉をかけるが、余生が長くないことを予感したような物言い、氏の表情は曇つたまだつた。果たして、それは永遠の別れとなつた。二年後、クレイグ氏の死亡記事を目にした漱石は、しばらく感慨に打たれた。彼はクレイグ氏畢生の仕事が行ななかつたことを惜しんだ。直接敬意を表わそうとはしないが、最後の一文にはクレイグ氏の逝去を悲しむ気持ちは強く感じられる。

師の業績が出版されないことを惜しむ気持ちを、豊子愷も林先生に対して示したのである。先に引いたところで、林先生と対面座談しながら、豊子愷は彼に敬愛の念を覚え、その精神が長く世に残ることを願つた。そうして彼は林先生に楽譜がすでに出版されたかをたずね、未刊でしかも公刊するつもりはないと聞くと、彼はそれを借りてノートに写すことにしたのである。彼にとつて、このノートは林先生の形見となり、彼の師への愛情の徴ともなつた。

以上において、両作品の構成や文章表現を対比させ、主に共通点を探ってきた。それでは、いかなる相違があるのだろうか。

形式的に見て、「クレイグ先生」は三節からなり、「林先生」は分節されていない。また、分量的に同じぐらいなのだが、前者は後者に比べて著しく段落分けが多い。内容的には、前者には女中のジェーンがたびたび登場し、作品におどけた活気をもたらししている。一

方の「林先生」でも、家主でしかも林先生の家事を手伝う年配の女性に言及されるものの、彼女は会話には参加せず、それほどの存在感はない。

そのほか、「林先生」は冒頭と篇末を呼応させ、緊密に構成されている。「クレイグ先生」の方は新聞に三日間にわたつて連載されたという成立事情にも左右されて、三節それぞれにまとまりがあり、全篇通して読むと話題が多岐にわたる感じがする。

さらに、「林先生」で「ノート」というモチーフは重要な役割を演じるが、「クレイグ先生」にはそれに当たるものはない。クレイグ氏の書齋で、漱石は氏の「大切な宝物」の「青表紙の手帳」を見かけるが、それは両者を結ぶ絆とはならなかつた。と考えると、この「ノート」というモチーフは実に巧みに設定されたものといえる。

三 「林先生」と「藤野先生」

「林先生」を創作する際、豊子愷は魯迅の「藤野先生」を意識したのだろうか。日本留学時に教わつた教師をテーマとするエッセーとして、「藤野先生」は先行作品であり、豊子愷がそれを知らなかつたとは考えにくいであろう。というのも、彼は後に魯迅の小説を題材に漫画を描くなど、魯迅作品に親しんでいたと思われるからである。⁽¹⁹⁾

「藤野先生」は魯迅が仙台で医学を学んだ折の体験に基づく。藤野

先生こと藤野厳九郎（一八七四—一九四五）は解剖学教授で、実直な人柄で思いやりのある好人物として描かれている。みずからの服装にはあまりこだわらないが、魯迅の授業ノートを丁寧に添削するなど親身になって指導してくれた。別れの際に贈られた写真をずつと壁にかけ、魯迅は藤野先生をいわゆる「恩師」として仰ぎ続けたのである。

ところが、「藤野先生」は留学時の魯迅自身の医学から文学への転向の問題をも含み、中国人留学生への差別を思わせる匿名の手紙事件など当時の時代背景を反映するなどにより、テーマはやや分散し、藤野先生のみを記した作品ではない。

ここで、この二篇を比較対照していきたいが、先にモチーフの相似に注目しよう。

「藤野先生」にも「ノート」は重要なモチーフとして登場する。別れを告げに行った際、魯迅は藤野先生から「惜別」と題字が書かれた写真を贈られるが、「ノート」はそれと同様二人の間の師弟の絆を示すものである。それは藤野先生に関する記述の中で最も詳しく、それゆえ全篇を通して重要なモチーフともいえる。「藤野先生」は魯迅の留学中のみずからの境遇に多くの紙数を割き、藤野先生についての内容は案外少ない。エピソードとして、最初の授業とノートの添削、それから解剖学実習の折の研究室での談話、さらに別れを告げる場面が挙げられる。そのほかの挿話——仙台へ移った背景、

匿名手紙事件、幻灯事件など——は藤野先生とはあまり関係はない。よって、結末にふたたび言及されるノートは非常に重要な意味を持つ。その経緯を見ておこう。

（初回の授業から——引用者注記）一週間が過ぎた土曜日だったと思う。彼の助手はわたしを呼びに来た。研究室にうかがうと、彼は人骨やいろいろな頭骨の間に座っていた。当時彼は頭骨の研究を進めており、後に論文が学校の雑誌に発表された。

「わたしの授業は、筆記できるのかね」と彼は聞いた。

「少しはできます」

「ちょっと見せて頂戴」

わたしはノートを手渡すと、彼はそのまま受け取り、二三日してから返してくれた。そして、今後毎週一度見せてくれと言った。わたしはそれを手に取り開けて見ると、驚かずにはいられなかった。と同時に、不安と感謝の入り混じったような気持ちになった。なぜならわたしのノートは初めから最後まで、みな赤ペンで添削されてあったのである。抜けているところが補われたのみでなく、文法の誤りも逐一直されていた。それは彼が担当する授業の骨学、血管学、神経学が終了するまで続いた。⁽²⁰⁾

初めて藤野先生の研究室に足を踏み入れたとき、先生は人骨や頭

骨に囲まれていた。この光景に魯迅は驚いたであろう。先生に会う折の異様な様子の描写は、「クレイグ先生」と「林先生」にも共通して見られた。こうして、毎回授業ノートを添削する上、ノートをもとに藤野先生は個人指導もしてくれた。魯迅が不安になったのは、先生の期待の大きさを感じたからであろう。それに応えられるのだろうか、彼は不安になったのである。

その後、魯迅は文学創作に転じ、藤野先生に別れを告げ、帰国後は連絡もせずに時が過ぎていった。しかし、彼は恩師を片時も忘れることはなかった。藤野先生の行為は、一留学生のためというより、中国の新しい医学のためであり、西洋医学を中国に伝えるためだったのだと、魯迅はそこに文化史的意義を見出すのであった。そうして藤野先生を讃えてから、彼は恩師との絆を確かめるように、次のように文を結んでいる。

彼が直してくれた講義ノートは、分厚い三冊にまとめ、永久の記念として、わたしはずっと大切にしていた。しかし、七年前引越しの際、途中で本箱が一つ壊れて、書籍が半ば失われ、ノートも中に含まれていた。運送局に連絡を取り、探させたが、ついに返事は得られなかった。ただ、彼の顔写真は今でも北京のわたしの寓居の東壁に、仕事机の向かい側にかけてある。夜、執筆に倦んで、なまけたいとき、わたしは顔を上げ、明かりの

中で彼の黒く瘦せた顔を見上げると、彼はあたかも抑揚のある、ゆつくりとした口調で話し出しそうで、そうしてわたしは勇気付けられ、ふたたび心を奮い立たせるのである。たばこに火をつけ、わたしは「正人君子」流に憎悪されるであろう文章を書き続けるのだ。⁽²¹⁾

師の恩を感じさせてくれたノートは紛失したが、別れの際に贈られた師の写真はなお壁にかけられ、日々勇気を与えてくれる。藤野先生に対する魯迅の思いのたけがよく表われているといえる。ノートを失った経緯を記したのは、その貴重さゆえであり、また本文中のノートに関する記述を連想させる。ノートと写真というモチーフは実に重要だが、この組み合わせはやや形を変え、実は「林先生」に見出せるのだ。そこでは、「ノート」は林先生を思い出す装置であり、また林先生の形見でもあり、師弟を強く結び付けるものという意味で、「藤野先生」におけるそれに通じるわけである。「写真」の方は比喩として「林先生」の冒頭と末尾に登場する。冒頭では、「行間より髪の毛がもじゃもじゃした林先生の顔が浮かび上がり」とあり、末尾には「色あせた写真を描線でもう一度繕うよう」とある。これらの表現は前後相呼応し、特に後者は林先生の肖像をイメージするように誘導し、読者は豊子愷の文章によるスケッチの印象をもう一度喚起し、小品を閉じることになる。

このように、「林先生」のエンディングは「藤野先生」に通じるモチーフを用いているが、両者の読後感はどうであろうか。両篇の結末部分を比べると、最高級の賛辞とともに魯迅は旧師への敬慕を表明するのに対して、豊子愷はかなりさりげないのである。林先生の印象は時とともに色あせ、ほとんど封印されていた思い出がノートを手にとることでもみがえったのだ。そのように、豊子愷は林先生を恩師として位置づけてはいない。

二作品の相違にもっと着目してみよう。「林先生」は豊子愷の目に映った林先生を始終描いているが、先にも触れたように「藤野先生」は魯迅自身の留学体験にも筆が及び、藤野先生にのみ焦点を当てていない。それゆえに、内容にもかなり開きがあるといえる。「藤野先生」から日本留学時の魯迅自身についても知ることができ、印象的な挿話が「林先生」より多いようにも思われるが、描写対象に焦点を据え続けたという点では、「林先生」は「クレイグ先生」により近い。

最後に

「藤野先生」と「クレイグ先生」を比較文化的視点で論じ、テキストの比較吟味も行なった平川祐弘氏は、両作品の共通点として、「ユーモアに富むスケッチの流儀」「反覆の（ほとんど作曲の技法を連想させる）テクニーク」「学者としての精励努力」「別れる前後の

悲哀の感情」「作品の余情」を挙げておられる。⁽²³⁾このうち、「別れる前後の悲哀の感情」は「林先生」には表わされていないが、ほかの共通点は大体「林先生」にもあてはまる。「林先生」にも誇張によるユーモア表現が用いられたことは先述したが、「反覆のテクニーク」も同作品の一特色として注目すべきであろう。平川氏は「クレイグ先生」における手や指の表現の多用（前後十回近く）に注目し、それが「意識的な反覆で効果を計算したもの」と評する。これに対して、「藤野先生」で反覆が見られるのは藤野先生の話す口調である（三度）。「林先生」に至っては、「髪の毛がもじゃもじゃした顔」は五回も使われ、「螺鈿をくつつけたような指」など手や指の表現は三回、林先生の家の前の「大きさが不揃いの石を敷きつめた路地」も二回用いられている。したがって、「林先生」も意図して反覆の特色を出そうとしているように思われる。繰り返される箇所も多くは、描写対象の身体的特徴を表わすものということも一致する。

また、多くの伴奏譜を編集し、音楽を生活とする林先生の辛勤努力する姿勢は藤野先生やクレイグ先生に通じるであろうし、結びの表現には強弱の差こそあれ、旧師を懐かしむ心情は等しく表われている。このほか、「林先生」と「クレイグ先生」の類似点に、さらに「冒頭を初めとして、詩的な内容を含むこと」「写實的な描写と主観的な表現を織り交ぜるという文章の表現技巧」「師の業績が埋

没することを残念に思う気持ち」「先生の居室を詳細に描いたこと」などがあり、よって前者は後者の影響を受けた可能性は大きいのではないかと考えられるのである。

そのうえ、「林先生」に見られる主要モチーフの「ノート」は「藤野先生」を参照したのではないかと、推測される。なぜなら、両作品において、同モチーフは実に同じような、重要な役割を果たしているからである。したがって、「林先生」は「クレイグ先生」、それから「クレイグ先生」を創造的に模倣したとされる「藤野先生」を同時に踏まえて書かれた小品文ではないかと、わたしは考える。

三作品を組上に載せることで、三者三様の特色も垣間見ることができるのではないか。ここで三人の主人公を対比させてみよう。思いやりがあり、教育には熱心で、人柄も優れているというのは林先生と藤野先生の二人に共通する性格特徴であり、それは儒教文化圏に見られる教師像といえよう。その点では、「自分は此の先生に於て未だ情合といふものを認めた事がない」と漱石が書くように、クレイグ氏は特に親切な教師ではなかったようだ。しかしながら、独身でやや偏屈な性格で、世に求めることもなく、世から求められることもない奇人、隠者の風貌とともに備えているのはクレイグ氏であり、林先生である。クレイグ氏は「大学の文学の椅子を抛つて」、林先生は自作の楽譜を出版するつもりはないとして、ともに無欲恬

淡な一面があるように描かれている。彼らのこうした行為は、高尚な人格の表れとして受け取られたのではないだろうか。豊子愷がそうした人間像に惹かれていたことは前述のとおりである。

次に、「藤野先生」には魯迅自身の切迫した心理——西洋医学を学び、病んだ中国人を治療するという医学の道から、国民の精神そのものを改造する文学の道を志すようになるという方向転換——は映し出され、留学生として差別を受けた体験も含まれている。ほかの二作品にはそうした記述はないものの、漱石や豊子愷の留学には心理的な葛藤はなかったわけではない。三者の留学の意義やそれぞれの心理などを比較検討するのも興味深いであろうが、医学留学の魯迅（一九〇二）と文学留学の漱石（一九〇二）に、平川氏は日中近代文化史の時差を読み取るが、ほぼ二十年後の豊子愷の芸術留学（一九二二）も同じように文化史のなかで位置づけられよう。実学優先の留学から、徐々に文学や芸術を学びに留学するものが増えていくのである。ちなみに、芸術留学の先陣を切り、一九〇五年日本に赴いたのは、豊子愷の師李叔同であった。

三篇に通ずる特徴を挙げてきたが、それぞれの特色はなんだろうか。ユーモア表現は共通点とはいえ、「クレイグ先生」は全篇において滑稽味が突出している。一方、「林先生」はその芸術味ゆえに豊子愷作品の中でも佳作だと考えてよいだろう。音楽を題材とし、絵画的なタッチで林先生の間像をスケッチし、そこに詩趣も添え

られた。画家にして音楽にも親しんだ文学者豊子愷らしさが存分に発揮されているといえよう。そして、「藤野先生」はといえば、藤野先生を主題としながら、魯迅自身の留学体験をからませたことが特色になる。留学生の授業ノートを添削する、心温かい教育者藤野先生とともに、救国の責任感を帯びた留学時代の魯迅と、文筆で「正人君子」流と戦う現在の魯迅の姿が映し出されている。

さて、本文では豊子愷の「林先生」と漱石の「クレイグ先生」、そして魯迅の「藤野先生」を対照し読み比べてきた。影響関係の可能性とそれぞれの特徴をある程度あぶりだすことができたかと思われる。しかし、「林先生」における「ノート」はその後失われ、豊子愷は林先生についてほかに詳細な記録を残さなかったため、林先生に関する実証研究には手をつけることはできなかった。今後、林先生の人となりが見えれば、豊子愷の文章との比較も可能になり、より深い読みが可能になるであろう。

注

- (1) 拙論「響き合うテキスト——豊子愷と漱石、ハーン」『日本研究』第三十三集、国際日本文化研究センター紀要、二〇〇六年十月、及び「響き合うテキスト(二)——豊子愷の「帯点笑答」ちよつと笑つてくださる」と漱石の『硝子戸の中』(二)『日本研究』第三十

四集、国際日本文化研究センター紀要、二〇〇七年三月、さらに「アリへの賛歌——豊子愷の「清晨(早朝)」とハーンの「蟻」、田中雄次・福澤清編『現代に生きるラフカディオ・ハーン』熊本出版文化会館、二〇〇七年三月を参照。

- (2) 平川祐弘『夏目漱石 非西洋の苦闘』講談社学術文庫、一九九一年十一月。著者は第一部の第一章「夏目漱石とクレイグ先生」と第二章「魯迅と藤野先生」で、「クレイグ先生」と「藤野先生」の二篇をそれぞれ漱石と魯迅の外国体験のなかで位置づけ、読み解き、第三章「魯迅と漱石先生」で前記二篇を比較し、関連を探った。

- (3) 豊子愷「林先生」『宇宙風』半月刊、第十二期、上海宇宙風社、一九三六年三月一日。引用は合冊本により、五七五ページ。本文は後に『縁縁堂再筆』一九三七年一月、開明書店に収録された。その際、初出に見られた文字の誤植が数箇所訂正された。建国後、一九五七年十一月人民文学出版社より出版された『縁縁堂隨筆』に再録され、その際作者による潤色、削除などが行なわれた。潤色は語彙句読点レベルで、一文のみ削られた。この人民文学出版社版における文言の潤色を生かしつつ、削除されたところを一九三七年版に依拠して補ったのは『豊子愷文集』文学卷一、浙江文芸出版社・浙江教育出版社、一九九二年六月所収のテキストであるという編者の注記があるが、本篇については削除箇所は補われていない。それは本論五二ページ下段に引かれた「当時まだ若かったわたしの心をとらえた」(原文は「頗不乏牽惹青年時代的心的魔力」という文である。今回上記四種のテキストを比較検討し、本文の引用は初出を元とした。ただし、英詩の一行目は、初出ではWhat is in your

heart let us one know; となっており、意味をなさないと思われるため、『縁縁堂再筆』版で訂正された、What is in your heart let no one know; とした。なお、東京大学所蔵の『宇宙風』誌より初出を入手する際、大野公賀氏にお世話になった。記して謝意を表わす。引用は拙訳によるが、吉川幸次郎訳「音楽研究会に於ける所見の二」『縁縁堂隨筆』創元社、一九四〇年を参照した。

(4) 前掲『宇宙風』半月刊、五七五ページ。

(5) 前掲『宇宙風』半月刊、五七五ページ。

(6) 前掲『宇宙風』半月刊、五七六ページ。

(7) 豊子愷「為青年説弘一法師」、初出は『中学生』戦時半月刊第六三期、一九四三年、ここでは『豊子愷文集』文学卷二、浙江文芸出版社・浙江教育出版社、一九九二年六月により、一四四ページ。

(8) 前掲『宇宙風』半月刊、五七六―五七七ページ。

(9) 前掲『宇宙風』半月刊、五七七ページ。

(10) 豊子愷は西洋美術の紹介者としても多くの業績を残したが、彼は特にフィンセント・ファン・ゴッホを好み、その伝記を一九二九年に出版した。そこで彼はゴッホを人格に優れ、作品による経済的な成功はあまり望まず、孤高で隠者のイメージを備えた人物として描いた。詳しくは拙著『中国文人画家の近代——豊子愷の西洋美術受容と日本』思文閣出版、二〇〇五年四月を参照。

(11) 前掲『宇宙風』半月刊、五七七ページ。

(12) 夏目漱石「クレイグ先生」、初出は『大阪朝日新聞』明治四十二年三月十日、十一日、十二日。後に『四篇』明治四十三年五月、春陽堂、また『漱石全集』第九巻、漱石全集刊行会、大正十四年四

月に収録された。豊子愷は後者所収のテキストを見ることができたと思われる。彼は後者に初めて収められた「初秋の一日」を踏まえ、「法味」を一九二六年に創作、発表している。「初秋の一日」は大正元年九月二十二日『大阪朝日新聞』に掲載され、単行本未収録作品であった。ここでは『漱石全集』第十二巻、岩波書店、一九九四年十二月により、二一五―二一六ページ。引用の際、ルビを省略した。

(13) 前掲書、二〇九ページ。

(14) 前掲書、二一〇ページ。

(15) 前掲書、二一一ページ。

(16) 前掲『夏目漱石 非西洋の苦闘』、六四―六八ページ。

(17) 前掲『漱石全集』第十二巻、二一七ページ。

(18) 豊子愷が見たと思われる『漱石全集』第九巻、大正十四年四月版では、「クレイグ先生」は分節されていない。

(19) 『豊子愷年譜』(盛興軍主編、青島出版社、二〇〇五年九月)によれば、当時上海にあった日本語書籍を販売する内山書店で店主内山完造の紹介で豊子愷はすでに魯迅と面識があったが、一九二七年十一月二十七日、画家の陶元慶とともに魯迅の家を訪れ、『苦悶の象徴』(厨川白村著)の翻訳について話したという(同書、一七四ページ)。また、豊子愷は一九三七年『漫画阿Q正伝』の画稿五十四枚を仕上げたが、戦火により灰燼に帰し、翌年疎開先の武漢で再度描いた八枚のうち二枚を雑誌に発表できたほかは、残りの画稿がまた戦火に焼かれた。一九三九年三月、画稿が広西で仕上げられ、同年九月開明書店によって刊行された(同書、三〇四ページ)。なお、「藤野先生」の初出は『莽原』半月刊、第一巻二三期、一九

二六年十二月十日。後に魯迅著『朝花夕拾』北京未名社、一九二八年九月に収められ、同書は一九三二年九月上海北新書局により再版された。

(20) 魯迅「藤野先生」『魯迅全集』第二卷、人民文学出版社、一九八一年北京第一版、一九九一年北京第五次印刷、三〇四ページ。

(21) 前掲書、三〇七ページ。

(22) 藤野先生の添削によるノートは一九五一年、魯迅の故郷紹興で発見されたという。大村泉「魯迅『藤野先生』について——『藤野先生』(一九二六年)は「回想的散文」(史実) かそれとも作品(小説)か？」『季刊中国』同刊行委員会、二〇〇六年秋季を参照。

(23) 前掲『夏目漱石 非西洋の苦闘』一六二—一六六ページ。

(24) 豊子愷作品の創作背景などに詳しい豊一吟氏(豊子愷の娘)によれば、「林先生」におけるノートは現存せず、林先生に関して小品文のほかに豊子愷が語ったという記憶もないという。